

試験範囲外
『3. 労働と社会』の
「1.2 分業」への補足

社会というフィルター

社会的分業の実現

(参考)

分業の規模とその制御

(参考)

(参考)

外部的・持続的なシステムの不要性

- 家族
 - 目と目で通じ合う (かもしれない)。
- ごく小規模なコミュニティ (共同体)
 - 話し合いでも何とかなる (かもしれない)。

(参考)

権威についての補足(1)

- 個人的労働における意志は社会的労働においては**権威**として実現される。【⇒「7.」で詳述】
- 社会的分業を調整するためには、各人が従うべき**権威**が必要である。

(参考)

権威についての補足(2)

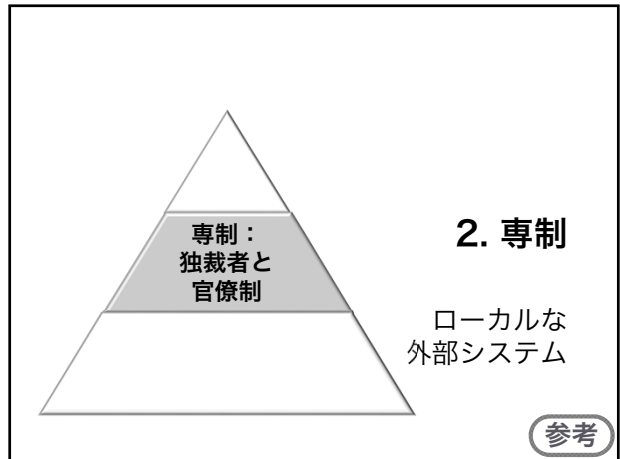
- 本能的に形成された前近代的家族ならば、明確な外部的システムがなくても、各人が家長の権威に従うかもしれない(自明の権威)。
- 現代社会であっても、ごく小規模なコミュニティならば、分業のたびごとに、みんなで意見を出し合って、合意(権威として従うべき共通意志)すればいいかもしれない(いわば直接民主制)。
- どちらの場合にも、権威はまだ個人の外部にシステム化されてはいない。

(参考)

権威についての補足(3)

- 市場においては、競争の圧力が権威を代替する。
【☞「4.」で詳述】
- 資本主義営利企業の内部においては、前近代社会とは異なる形で、権威と専制が復活する。
【☞「7.」で詳述】

参考



参考

2. 専制 [ローカルなシステム]

- 社会的分業の規模が大きくなると、個人の外部にシステムが必要になる。
- “外部に出た”ということから直接に現れる権威のシステムは専制である。
- **専制 (Despotism)**
= 一人による絶対的支配
⇕ 対義語
- **民主制 (Democracy)**
= 人民による支配

参考

物件のシステムの発展

- 専制においては、社会的分業全体について、それを行う各個人の意志ではなく、各個人の外部にいる個人の権威が調整する。
- 社会的分業の規模がますます大きくなると、専制と言っても、単一の個人が権威としてすべての調整を行うのは不可能になる。
↓ こうして、やがて
- 調整を代行する官僚制が形成される。

参考

物件のシステムとしての法治(1)

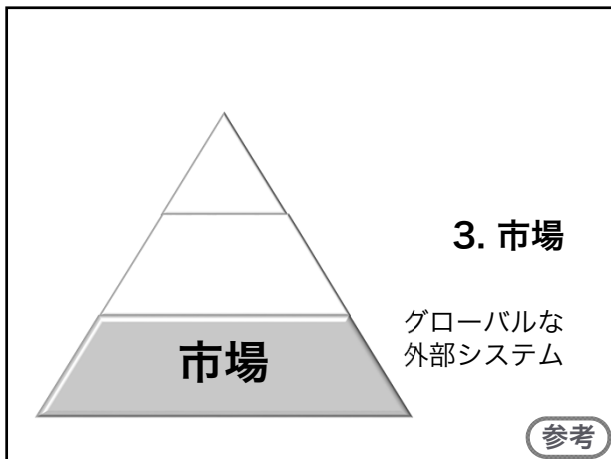
- 調整の執行者（官僚）の数が増大し、システムが複雑になるにつれて、ヒトくさいシステムも消えていく。
- 人格そのものの権威に代わって、法というシステムが権威として現れる。
 - ・ 人民も専制者も官僚達もこの法に従って社会的分業に参加するようになる。

参考

物件のシステムとしての法治(2)

- 法は、――
 - ・ ヒト (=人格) のシステム、つまり人格たちの直接的な関係ではなく、
 - ・ モノ (=物件) のシステム (とは言っても、もちろん、自然物ではなく、人格の意志が込められたモノのシステム) である。

参考



市場

- もっと社会的分業が大規模になると、完全な物件のシステムが必要になる。
- 人格（人びと）は“競争の権威”にだけ従う。

参考

モノのシステムの極限としての市場【☞「4.」で詳述】

- モノ（＝物件）のシステムの発展は市場社会の形成に帰着する。
- 法のシステムの場合は、物件のシステムとは言っても、まだ（立法者が誰であれ）人格の意志による立法があった。
- 市場**社会**は、独裁者が命令して作ったものでもないし、みんなの合意で作ったものでもない。すなわち、人格の意志を完全に排除した物件のシステム。

参考

「4.」で明らかにするように…

- 市場は最も発達した社会的分業の形態
- 市場において、——
 - 一方では、人間社会の概念の通りに、グローバルな社会が実現された。
 - 他方では、人間社会の概念とは違って、社会全体は無自覚的に形成された。

参考